

# 授 業 概 要

科目名 介護の基本 I	授業の種類 講義	授業担当者 丸山 保子 (実務経験者)	
授業回数 30回	時間数(単位数) 60時間(4単位)	配当学年・時期 1学年 前期	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>介護を必要とする人を生活の観点から捉える力を養う。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>介護の歴史や概念、生活ニーズ等について学習をしていく中で、「生活とは何か」「介護とは何か」の問いに対し真摯に向き合い、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う為の授業である。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>1 介護を必要とする人の立場や状況を理解するとともに、自立に向けた介護を探求することができる。</p>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p style="margin-left: 20px;">I <u>介護を必要とする人の理解</u></p> <p>1 私たちの生活の理解①</p> <p>2 私たちの生活の理解②(時代背景と暮らしの変化)</p> <p>3 生活の個別性と多様性の理解①</p> <p>4 生活の個別性と多様性の理解②</p> <p>5 高齢者の生活(介護福祉施設・病院等見学・説明)</p> <p>6 高齢者の生活(介護福祉施設・病院等見学・説明)</p> <p>7 障害者の生活(障害者施設等見学・説明)</p> <p>8 障害者の生活(障害者施設等見学・説明)</p> <p>9 「その人らしさ」と「生活ニーズ」の理解①</p> <p>10 「その人らしさ」と「生活ニーズ」の理解②</p> <p>11 「その人らしさ」と「生活ニーズ」の理解③</p> <p>12 生活のしづらさの理解①</p> <p>13 生活のしづらさの理解②</p> <p>14 介護を必要とする人の生活を支えるしくみ①</p> <p>15 介護を必要とする人の生活を支えるしくみ②</p> <p>16 家族介護者の理解と支援</p> <p style="margin-left: 20px;">II <u>自立に向けた介護</u></p> <p>17 自立支援の考え方①</p> <p>18 自立支援の考え方②(自己決定と利用者本位)</p> <p>19 自立支援の考え方③(ICFの捉え方)</p> <p>20 社会福祉における自立支援の意義(エンパワメント、ストレングス)</p> <p>21～24 リハビリテーションと介護福祉</p>			

<p>2 1 リハビリテーションの理念</p> <p>2 2 リハビリテーションの目的と役割</p> <p>2 3 健康の概念と障害の捉え方</p> <p>2 4 ADL の概念と評価方法（バーセルインディックス、FIM 等）</p> <p>2 5 自立支援と介護予防</p> <p>2 6 自立支援と介護予防</p> <p>2 7 就労支援</p> <p>2 8 就労支援（就労施設見学）</p> <p>2 9 自立と生活支援</p> <p>3 0 終講試験（解答・解説含む）</p>	
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>最新 介護福祉士養成講座 3・4</p> <p>「介護の基本Ⅰ」「介護の基本Ⅱ」中央法規出版</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>規程の3分の2以上の出席であり、試験で60点以上の者に単位を認定する。</p>

# 授 業 概 要

科目名 介護の基本Ⅱ		授業の種類 講義		授業担当者 丸山 保子 (実務経験者)	
授業回数 30回	時間数(単位数) 60時間(4単位)	配当学年・時期 1学年 後期		必修・選択 必修科目	
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>「尊厳の保持」「自立支援」について、高齢者や障害者の生活と現在の介護サービスを概観しながら理解するとともに、介護福祉士という専門職・資格についての理解を深める。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>介護のあり方や介護福祉士の役割を問いながら授業を展開し、介護福祉士の基本的な知識や倫理を習得していく授業である。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 尊厳を支えることの意味について理解することができる。</li> <li>2 介護を取り巻く現状を把握し、介護福祉士の役割や倫理について理解することができる。</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p style="padding-left: 20px;">I <u>介護福祉の基本となる理念</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 介護福祉の基本となる理念(介護の意味)</li> </ol> <p style="padding-left: 20px;">II 社会の変化と介護福祉の歴史</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2 社会の変化と介護福祉の歴史(1970年以前から1970年代の量的充実の介護サービス)</li> <li>3 社会の変化と介護福祉の歴史(1980年代の質的向上の介護サービス)</li> <li>4 社会の変化と介護福祉の歴史(1990年代の介護サービス、人口・高齢化・家族機能の変化)</li> <li>5 社会の変化と介護福祉の歴史(2000年以降の介護サービス、)</li> </ol> <p style="padding-left: 20px;">III 介護の社会化</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6 介護の社会化</li> </ol> <p style="padding-left: 20px;">IV 介護の基本理念</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>7 介護福祉の基本理念(尊厳)</li> <li>8 介護福祉の基本理念(自立)</li> </ol> <p style="padding-left: 20px;">VI <u>介護福祉士の役割と機能</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>9 介護福祉士の定義</li> <li>10 介護福祉士の義務規定</li> <li>11 介護福祉士カリキュラムの変遷</li> <li>12 介護福祉士の役割と機能</li> <li>13 介護福祉士の活動の場と役割①(地域共生社会と介護福祉士の役割)</li> <li>14 介護福祉士の活動の場と役割②(介護予防と介護福祉士の役割)</li> <li>15 介護福祉士の活動の場と役割③(災害と介護福祉士の役割)</li> <li>16 介護福祉士の活動の場と役割④(医療的ケアと介護福祉士の役割)</li> <li>17 介護福祉士を支える団体</li> </ol> <p style="padding-left: 20px;">VII <u>介護福祉士の倫理</u></p>					

<p>1 8 介護福祉士の倫理</p> <p>1 9 日本介護福祉士会の倫理綱領と行動規範①</p> <p>2 0 日本介護福祉士会の倫理綱領と行動規範②</p> <p>2 1 尊厳ある介護実践①</p> <p>2 2 尊厳ある介護実践②</p> <p>2 3 プライバシーの保護①</p> <p>2 4 プライバシーの保護②</p> <p>2 5 虐待と生命倫理①</p> <p>2 6 虐待と生命倫理②</p> <p>2 7 身体拘束</p> <p>2 8 求められる介護福祉士①</p> <p>2 9 求められる介護福祉士②</p> <p>3 0 終講試験（解答・解説含む）</p>	
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>最新 介護福祉士養成講座 3・4</p> <p>「介護の基本Ⅰ」「介護の基本Ⅱ」中央法規出版</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>規程の3分の2以上の出席であり、試験で60点以上の者に単位を認定する。</p>

# 授 業 概 要

科目名 介護の基本Ⅲ		授業の種類 講義		授業担当者 丸山 保子 (実務経験者)	
授業回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学年・時期 2学年 後期		必修・選択 必修科目	
<p>[授業の目的・ねらい] 介護サービスの意義や動向、ならびに介護におけるチームケアについて理解する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 昨今の介護サービスをベースに将来展望を見据えながら授業展開していく。また、介護職から見た多職種・地域とのつながりを如何に充実させ、利用者に還元するかを導き出すため、実習等の体験を用いながら授業を行っていく。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 これまでの介護サービスについて理解し、将来の介護サービスの方向性を見出しながら介護を行うことができる。</li> <li>2 介護実践における連携の意義や必要性を理解し、その知識を現場で活かすことができる。</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p style="padding-left: 2em;">I <u>介護福祉を必要とする人の生活を支えるしくみ</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 <u>介護を必要とする人の生活を支えるしくみ①</u> (ケアマネジメント・生活の拠点)</li> <li>2 <u>介護を必要とする人の生活を支えるしくみ②</u> (高齢者のフォーマルサービスの概要)</li> <li>3 <u>介護を必要とする人の生活を支えるしくみ③</u> (障害者のフォーマルサービスの概要)</li> <li>4 <u>介護を必要とする人の生活を支えるしくみ④</u> (インフォーマルサポートの役割)</li> <li>5 <u>介護を必要とする人の生活を支えるしくみ⑤</u> (インフォーマルサポートの役割)</li> </ol> <p>6～7 介護サービスについて考える(グループ活動)</p> <p style="padding-left: 2em;">II <u>協働する多職種の役割と機能</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>8 <u>協働する多職種の役割と機能</u></li> <li>9 介護実践における連携①(多種職連携の意義と目的)</li> <li>10 介護実践における連携②(協働職種の理解と連携のあり方)</li> <li>11 介護実践における連携③(地域連携の意義と目的)</li> <li>12 介護実践における連携④(地域連携にかかわる機関の理解)</li> <li>13 連携について考える(グループ活動)</li> <li>14 介護福祉士を目指すみなさんへ</li> <li>15 終講試験(解答・解説含む)</li> </ol>					
[使用テキスト・参考文献] 最新 介護福祉士養成講座3・4 「介護の基本Ⅰ」「介護の基本Ⅱ」中央法規出版			[単位認定の方法及び基準] 規程の3分の2以上の出席であり、試験で60点以上の者に単位を認定する。		

# 授 業 概 要

科目名 介護の基本Ⅳ		授業の種類 講義		授業担当者 木村 ひとみ (実務経験者)	
授業回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学年・時期 2学年 後期		必修・選択 必修科目	
<p>[授業の目的・ねらい] 介護における安全について理解する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 介護における安全の確保とリスクマネジメントについて学習するとともに、介護従事者自身の安全についても学習する。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)] 利用者と介護従事者双方の安全を管理する基本的能力を身につける。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p style="padding-left: 20px;">Ⅰ 介護における安全の確保</p> <p style="padding-left: 40px;">1 <u>介護における安全の確保とリスクマネジメント①</u>(観察・予測・分析)</p> <p style="padding-left: 40px;">2 <u>介護における安全の確保とリスクマネジメント②</u>(セーフティマネジメント)</p> <p style="padding-left: 20px;">Ⅱ 事故防止、安全対策</p> <p style="padding-left: 40px;">3 事故防止、安全対策のためのリスクマネジメントのしくみ</p> <p style="padding-left: 40px;">4 事故防止、安全対策の基礎と実際(防火・防災対策・緊急連絡システム)</p> <p style="padding-left: 40px;">5 誤嚥・呼吸困難・転倒・転落・骨折の予防</p> <p style="padding-left: 40px;">6 応急手当①(誤嚥・呼吸困難)</p> <p style="padding-left: 40px;">7 応急手当②(骨折・外傷)</p> <p style="padding-left: 40px;">8 救急蘇生</p> <p style="padding-left: 40px;">9 救急蘇生法演習① *消防署に依頼</p> <p style="padding-left: 40px;">10 救急蘇生法演習② *消防署に依頼</p> <p style="padding-left: 20px;">Ⅲ 感染対策</p> <p style="padding-left: 40px;">11 生活の場における感染症・感染対策の基礎知識(感染症発生時の対応等)</p> <p style="padding-left: 20px;">Ⅳ 薬剤の取扱いに関する基礎知識と連携</p> <p style="padding-left: 40px;">12 安全な薬物療法を支える視点(医師法17条及び保健師助産師看護師法31条の解釈)</p> <p style="padding-left: 20px;">Ⅳ <u>介護従事者の安全</u></p> <p style="padding-left: 40px;">13 <u>介護従事者の安全①</u>(こころの健康管理 ストレス 燃え尽き症候群等)</p> <p style="padding-left: 40px;">14 <u>介護従事者の安全②</u>(身体の健康管理 {感染・腰痛予防}、安心して働ける環境づくり)</p> <p style="padding-left: 40px;">15 終講試験(解答・解説含む)</p>					
[使用テキスト・参考文献] 最新 介護福祉士養成講座4・6 「介護の基本Ⅱ」「生活支援技術Ⅰ」中央法規 出版			[単位認定の方法及び基準] 規程の3分の2以上の出席であり、試験で60 点以上の者に単位を認定する。		

# 授 業 概 要

科目名 コミュニケーション技術 I		授業の種類 講義		授業担当者 佐藤 正幸 (実務経験者)	
授業回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学年・時期 1学年・通年		必修・選択 必修科目	
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>対象者との支援関係の構築やチームケアを実践するためのコミュニケーションの意義や技法を学び、介護実践に必要なコミュニケーション能力を養う学習とする。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>本人の置かれている状況を理解し、支援関係の構築や意思決定を支援するためのコミュニケーションの基本的な技術が身につくようにする。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p>I <u>介護を必要とする人とのコミュニケーション①</u></p> <p>1 介護におけるコミュニケーションとは</p> <p>2 自己理解と他者理解①</p> <p>3 自己理解と他者理解②</p> <p>II <u>介護を必要とする人とのコミュニケーション②</u></p> <p>4 傾聴技法①</p> <p>5 傾聴技法②</p> <p>6 傾聴技法③</p> <p>7 メッセージをありのままに受け止める技法</p> <p>8 共感技法</p> <p>9 言語コミュニケーション</p> <p>10 非言語コミュニケーションと準言語</p> <p>11 利用者に喜ばれる言葉づかい, 嫌われる言葉づかい</p> <p>12 動機づけ</p> <p>13 ものの見方に変化を生み出す技術①</p> <p>14 ものの見方に変化を生み出す技術②</p> <p>15 終講試験(解答・解説含む)</p>					
[使用テキスト・参考文献] 最新 介護福祉士養成講座5 「コミュニケーション技術」 中央法規出版			[単位認定の方法及び基準] 規程の3分の2以上の出席であり、試験で60点以上の者に単位を認定する。		

# 授 業 概 要

科目名 コミュニケーション技術Ⅱ		授業の種類 演習		授業担当者 佐藤 正幸 (実務経験者)	
授業回数 15回	時間数(単位数) 30時間(1単位)	配当学年・時期 1学年・通年	必修・選択 必修科目		
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>対象者との支援関係の構築やチームケアを実践するためのコミュニケーションの意義や技法を学び、介護実践に必要なコミュニケーション能力を養う学習とする。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 家族の置かれている状況を理解し、家族への支援やパートナーシップを構築するためのコミュニケーションの基本的な技術が身につくようにする。</li> <li>2 障害の特性に応じたコミュニケーションの基本的技術が身につくようにする。</li> <li>3 情報を適切にまとめ、発信するために、介護実践における情報の共有化の意義を理解し、その具体的な方法や情報の管理について理解できるようにする。</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 集団におけるコミュニケーション技術</li> <li>I <u>介護における家族とのコミュニケーション</u> <ol style="list-style-type: none"> <li>2 家族との関係づくり</li> <li>3 家族への助言・指導・調整とストレスへの対応</li> </ol> </li> <li>II <u>介護におけるチームのコミュニケーション</u> <ol style="list-style-type: none"> <li>4 チームのコミュニケーションとは</li> <li>5 報告・連絡・相談の技術</li> <li>6 新人職員への指導方法とは</li> <li>7 効果的な助言方法とは</li> <li>8 記録の技術</li> <li>9 介護の議事進行・説明の技術</li> </ol> </li> <li>III <u>障害の特性に応じたコミュニケーション</u> <ol style="list-style-type: none"> <li>10 さまざまなコミュニケーション障害のある人への支援①</li> <li>11 さまざまなコミュニケーション障害のある人への支援②</li> <li>12 さまざまなコミュニケーション障害のある人への支援③</li> <li>13 さまざまなコミュニケーション障害のある人への支援④</li> <li>14 さまざまなコミュニケーション障害のある人への支援⑤</li> <li>15 終講試験(解答・解説含む)</li> </ol> </li> </ol>					
[使用テキスト・参考文献] 最新 介護福祉士養成講座5 「コミュニケーション技術」 中央法規出版			[単位認定の方法及び基準] 規程の3分の2以上の出席であり、試験で60点以上の者に単位を認定する。		



# 授 業 概 要

科目名 生活支援技術 I		授業の種類 演習	授業担当者 丸山保子、木村ひとみ 佐藤正幸 (実務経験者)
授業回数 4 5 回	時間数 (単位数) 9 0 時間 (3 単位)	配当学年・時期 1 学年・通年	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする。</p> <p>[授業終了時の達成課題 (到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 対象者の能力を活用・発揮し、自立を支援するための生活支援技術の基本を習得する。 また、実践の根拠について説明できる能力が身につくようにする。</li> <li>2 健康を保持するための休息や睡眠の重要性を理解し、安眠を促す環境を整える支援について理解できるようにする。</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p>I <u>生活支援の理解</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 介護実習室の使用方法について、身だしなみ、技術演習の心構え、演習グループ分け</li> <li>2 生活支援とは何か、生活支援に活かす ICF、生活支援に共通する技術 (説明・同意・観察・準備・評価・安全な介護)、ボディメカニクス</li> </ol> <p>II <u>休息・睡眠の介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>3 ベッドメイキング (2 人で行う) ①</li> <li>4 ベッドメイキング (2 人で行う) ②</li> <li>5 ベッドメイキング (1 人で行う)</li> </ol> <p>III <u>自立に向けた移動の介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6 講義 (移動の意義と目的、安全で気兼ねなく行動することを支える介護)</li> <li>7 ベッド上での移動 (上方移動、水平移動)</li> <li>8 ベッド上での移動 (側臥位 (対面法、背面法))</li> <li>9 ベッドから起き上がりの介助、立ち上がりの介助</li> <li>1 0 歩行介助 (歩行器、杖、2 動作歩行、3 動作歩行、階段昇降)</li> <li>1 1 講義 (車いすの構造と移動介助 (段差、スロープ、エレベータ乗降、移動速度))</li> <li>1 2 移乗介助 (ベッドから車いす)</li> <li>1 3 移乗介助 (車いすからベッド)</li> <li>1 4 移動介助 (段差、スロープ、車いす操作、移動速度)</li> <li>1 5 移動介助 (校外にて車いす操作、介助体験)</li> </ol> <p>IV <u>自立に向けた食事の介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 6 講義 (おいしく食べるための環境整備、食器用具の整備、嚥下に適した姿勢)</li> <li>1 7 食事介助 (座位、嗜好、介助スピード、介助量)</li> <li>1 8 講義 (誤嚥、臥床時の食事介助)</li> </ol>			

<p>19 口腔ケア</p> <p>V <u>自立に向けた身じたくの介護</u></p> <p>20 講義（自立した身じたくとは（衣類着脱の意義と目的、生活習慣と装いの楽しみを支える介護））</p> <p>21 着脱介助（座位、前開上着＋ズボン）</p> <p>22 着脱介助（座位、かぶりの上着＋ズボン）</p> <p>23 着脱介助（臥位）</p> <p>24 着脱介助（臥位）</p> <p>VI <u>自立に向けた排泄の介護</u></p> <p>25 講義（気持ちよく排泄するための環境整備、排泄姿勢、排泄メカニズム）</p> <p>26 トイレでの排泄介助</p> <p>27 ポータブルトイレでの排泄介助</p> <p>28 おむつ交換①</p> <p>29 おむつ交換②</p> <p>30 尿器・便器</p> <p>31 尿器・便器</p> <p>VII <u>自立に向けた入浴・清潔保持の介護</u></p> <p>32 講義（気持ちよく入浴するための環境整備、身体レベルに合わせた浴槽の種別）</p> <p>33 入浴介助（個浴、特殊浴槽）①</p> <p>34 入浴介助（個浴、特殊浴槽）②</p> <p>35 手浴、足浴</p> <p>36 洗髪（臥床）</p> <p>37 部分清拭</p> <p>38 全身清拭①</p> <p>39 全身清拭②</p> <p>40 シーツ交換（利用者が臥床したまま）</p> <p>41 シーツ交換（利用者が臥床したまま）</p> <p>42 罨法</p> <p>43 終講試験（実技試験）</p> <p>44 終講試験（実技試験）</p> <p>45 終講試験（筆記試験）</p>	
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>最新 介護福祉士養成講座6 「生活支援技術Ⅰ」 中央法規出版</p> <p>最新 介護福祉士養成講座7 「生活支援技術Ⅱ」 中央法規出版</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>規程の3分の2以上の出席であり、実技試験・筆記試験・提出物・身だしなみにて総合評価60点以上の者に単位を認定する。</p>

# 授 業 概 要

科目名 生活支援技術Ⅱ		授業の種類 演習	授業担当者 丸山保子、木村ひとみ 佐藤正幸 (実務経験者)
授業回数 15回	時間数(単位数) 30時間(1単位)	配当学年・時期 1学年・後期	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 対象者の能力を活用・発揮し、自立を支援するための生活支援技術の展開方法が身につくようにする。また、実践の根拠について説明できる能力が身につくようにする。</li> <li>2 健康を保持するための休息や睡眠の重要性を理解し、安眠を促す環境を整える支援の方法が身につくようにする。</li> <li>3 人生の最終段階にある人と家族をケアするために、終末期の経過に沿った支援やチームケアの実践について理解できるようにする。</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p>I <u>生活支援の理解</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 生活支援とチームアプローチ</li> </ol> <p>II <u>自立に向けた移動の介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2 対象者の状態に応じた移動の介助①</li> <li>3 対象者の状態に応じた移動の介助②</li> </ol> <p>III <u>自立に向けた身じたくの介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4 対象者の状態に応じた身じたくの介助①</li> <li>5 対象者の状態に応じた身じたくの介助②</li> </ol> <p>IV <u>自立に向けた食事の介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6 対象者の状態に応じた食事の介助</li> </ol> <p>V <u>自立に向けた入浴・清潔保持の介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>7 対象者の状態に応じた入浴・清潔保持の介助</li> </ol> <p>VI <u>自立に向けた排泄の介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>8 対象者の状態に応じた排泄の介助①</li> <li>9 対象者の状態に応じた排泄の介助②</li> </ol> <p>VII <u>休息・睡眠の介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>10 対象者の状態に応じた休息・睡眠の介助①</li> <li>11 対象者の状態に応じた休息・睡眠の介助②</li> </ol> <p>VIII <u>人生の最終段階における介護</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>12 対象者の人生の最終段階における介護職の関わり方①</li> <li>13 対象者の人生の最終段階における介護職の関わり方②</li> <li>14 対象者の人生の最終段階における介護職の関わり方③</li> <li>15 終講試験</li> </ol>			
[使用テキスト・参考文献] 最新 介護福祉士養成講座6		[単位認定の方法及び基準] 規程の3分の2以上の出席であり、試験による	

「生活支援技術Ⅰ」 中央法規出版 最新 介護福祉士養成講座 7 「生活支援技術Ⅱ」 中央法規出版	成績が60点以上の者に単位を認定する。
--	---------------------

# 授 業 概 要

科目名 生活支援技術Ⅲ	授業の種類 演習	授業担当者 中川芳江、榊瀧未紀 丸山保子、木村ひとみ 佐藤正幸 (実務経験者)	
授業回数 30回	時間数(単位数) 60時間(2単位)	配当学年・時期 1学年・通年	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 生活の継続性を支援する観点から、対象者が個々の状態に応じた家事を自立的に行うことを支援するための基礎的な知識・技術を習得できるようにする。</li> <li>2 生活の豊かさや心身の活性化、自立支援のための居住環境の整備について基礎的な知識を理解できるようにする。</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p>I <u>自立に向けた家事の介護①</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 調理実習1 嚥下・咀嚼に配慮した食事の調理</li> <li>2 調理実習1 嚥下・咀嚼に配慮した食事の調理</li> <li>3 調理実習2 保存食品と加工食品の製作(だしの取り方含む)</li> <li>4 調理実習2 保存食品と加工食品の製作(だしの取り方含む)</li> <li>5 調理実習3 献立作成の手順と注意点 塩分に配慮した食事</li> </ol> <p>II <u>自立に向けた家事の介護②</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6 介護を必要とする人の理解①家庭生活の現代的意義</li> <li>7 介護を必要とする人の理解②家庭経営</li> <li>8 介護を必要とする人の理解③家庭管理・家庭経済</li> <li>9 家事の機能</li> <li>10 家庭生活と食事</li> <li>11 調理</li> <li>12 被服の役割と機能</li> <li>13 被服の管理、洗濯方法</li> <li>14 衣類、寝具の衛生管理</li> <li>15 裁縫</li> <li>16 住環境の整備(清掃、ごみ捨て)</li> <li>17 買い物</li> <li>18 介護を必要とする人の衣食住</li> <li>19 多職種との連携</li> <li>20 終講試験(解答・解説含む)</li> </ol>			

<p>III <u>自立に向けた居住環境の整備</u></p> <p>2 1 住まいの役割と機能</p> <p>2 2 自立に向けた居住環境整備の視点</p> <p>2 3 住宅改修①</p> <p>2 4 住宅のバリアフリー、ユニバーサルデザイン</p> <p>2 5 対象者の状態・状況に応じた留意点①</p> <p>IV <u>福祉用具の意義と活用</u></p> <p>2 6 福祉用具の意義と目的</p> <p>2 7 自立に向けた福祉用具活用の視点①</p> <p>2 8 自立に向けた福祉用具活用の視点②</p> <p>2 9 適切な福祉用具の選択の知識と留意点</p> <p>3 0 終講試験（居住環境・福祉用具）（解答・解説含む）</p>	
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>最新 介護福祉士養成講座 6 「生活支援技術 I」 中央法規出版</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>規程の 3 分の 2 以上の出席であり、試験又はレポートの成績が 6 0 点以上の者に単位を認定する。</p>

# 授 業 概 要

科目名 生活支援技術Ⅳ		授業の種類 演習	授業担当者 丸山保子、木村ひとみ 佐藤正幸 (実務経験者)
授業回数 15回	時間数(単位数) 30時間(1単位)	配当学年・時期 2学年・前期	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>介護福祉士として実務につくための基礎的な知識・技術をふまえたうえで、事例に対する適切な支援の方法を実践することができる。</p>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>I <u>休息・睡眠の介護</u></p> <p>1 オリエンテーション 事例1「ベッドメイキング」の事例提示と練習</p> <p>2 練習</p> <p>3 チェックテスト</p> <p>II <u>自立に向けた移動の介護</u></p> <p>4 事例2「体位変換」の事例提示と練習</p> <p>5 練習</p> <p>6 チェックテスト</p> <p>III <u>自立に向けた身じたくの介護</u></p> <p>7 事例3「着脱介助」の事例提示と練習</p> <p>8 練習</p> <p>9 チェックテスト</p> <p>IV <u>自立に向けた排泄の介護</u></p> <p>10 事例4「排泄介助」の事例提示と練習</p> <p>11 練習</p> <p>12 チェックテスト</p> <p>V <u>自立に向けた移動の介護</u></p> <p>13 事例5「移乗介助」の事例提示と練習</p> <p>14 練習</p> <p>15 チェックテスト</p>			
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>最新 介護福祉士養成講座6 「生活支援技術Ⅰ」 中央法規出版</p> <p>最新 介護福祉士養成講座7 「生活支援技術Ⅱ」 中央法規出版</p>		<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>規程の3分の2以上の出席であり、全ての試験による成績が60点以上の者に単位を認定する。</p>	

# 授 業 概 要

科目名 生活支援技術V		授業の種類 演習	授業担当者 丸山保子、木村ひとみ 佐藤正幸 (実務経験者)
授業回数 45回	時間数(単位数) 90時間(3単位)	配当学年・時期 2学年・通年	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する学習とする。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>障害の特性に応じた支援の方法や環境整備について基礎的な知識・技術を習得できるようにする。</p>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p>I 感覚機能障害に応じた<u>生活支援の理解</u>(聴覚・視覚)          感覚機能が低下している人の生活支援の留意点          1～4 介助の実際(視覚)          5～8 介助の実際(聴覚)</p> <p>II 運動機能障害に応じた<u>生活支援の理解</u>(肢体不自由)          運動機能が低下している人の生活支援の留意点          9～12 介助の実際(肢体不自由)          13～16 介助の実際(高次脳機能障害)          17 終講試験(視覚、聴覚、肢体不自由、高次脳機能障害)</p> <p>III 摂食障害に応じた<u>生活支援の理解</u>          18～19 食事の意義と目的(食事の社会・文化的、心理的、身体的意義と目的・利用者のアセスメント)          20 自立に向けた食事介護の視点(おいしく食べることを支える介護)          21 食事療法の目的・介護者の役割・治療と食に関する介護(食事と与薬の関係)          22～23 対象者の状態に応じた留意点(感覚機能、運動機能、認知・知的機能、摂食機能低下、疾患、内部障害がある人の留意点)          24 衛生管理(各食品別調理の留意点、台所の整理、調理器具の清掃点検)          25 低カロリー食と低塩分食、食事の自己診断(食品の分類と食品の取り方)単位計算(食品交換表の使い方)          26 食事計画及び献立作成の手順の確認・留意点          27 献立作成の手順と注意点 1600kcalの老人食(保存食を含む)</p> <p>IV 発達・知的の障害に応じた<u>生活支援の理解</u>          28～32 介助の実際(発達・知的の障害)</p> <p>V 精神障害に応じた<u>生活支援の理解</u>          33～35 介助の実際(精神障害)</p>			



<p>VI 重複障害に応じた生活支援の理解</p> <p>36～38 重複障害のある人の生活支援の留意点</p> <p>VII 内部障害に応じた生活支援の理解</p> <p>39～44 内部障害のある人の生活支援の留意点</p> <p>45 終講試験（調理、発達・知的、精神、重複、内部）</p>	
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>最新 介護福祉士養成講座6 「生活支援技術Ⅰ」 中央法規出版</p> <p>最新 介護福祉士養成講座8 「生活支援技術Ⅲ」 中央法規出版</p> <p>「わたしたちの手話1」 全日本ろうあ連盟</p> <p>「糖尿病食事療法のための食品交換表」 文光堂</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>規程の3分の2以上の出席であり、試験又はレポートで60点以上の者に単位を認定する。</p>

# 授 業 概 要

科目名 介護過程 I		授業の種類 講義	授業担当者 木村ひとみ・佐藤 正幸 丸山 保子 (実務経験者)
授業回数 30回	時間数(単位数) 60時間(4単位)	配当学年・時期 1学年 通年	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>介護過程(アセスメントの実施、介護計画の立案、適切な介護サービスの提供)の意義や一連の流れを展開方法、理論を理解する。また、実習体験を基に基礎的なアセスメントの立案を目指す。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>介護過程について、その意義並びに理論を学び、実践の場で基礎的な介護過程を展開していきながら、その必要性を理解していく。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 介護過程の意義について理解することができる。</li> <li>2 介護過程の展開方法を理解することができる。</li> </ol>			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]			
コマ数			
1 課題解決のための思考	16 介護実習 I のまとめ		
2 <u>介護過程の意義</u> ・目的	17 介護実習 I のまとめ		
3 <u>介護過程の基礎的理解</u> (全体像)	18 情報の解釈・関連付け・統合化		
4 アセスメントとは(情報収集)	19 情報の解釈・関連付け・統合化		
5 アセスメントとは(解釈・統合化)	20 ニーズ抽出の考え方		
6 介護過程と記録(意義と目的)	21 ニーズ抽出の考え方と方法		
7 介護過程と記録(実習シート)	22 生活課題の優先順位		
8 情報収集の目的	23 生活課題の明確化		
9 基本的な情報とその必要性	24 生活課題の表現		
10 基本的な情報のまとめ方	25 個別援助計画の意義・目的		
11 ICF に基づくアセスメント	26 ケアの標準化と個別化の視点		
12 ICF に基づくアセスメント	27 目標の設定		
13 情報収集の方法と留意点	28 具体的援助方法		
14 アセスメントの実際	29 援助内容の記述方法		
15 アセスメントの実際	30 終講試験		
[使用テキスト・参考文献] 最新 介護福祉士養成講座9 「介護過程」中央法規出版		[単位認定の方法及び基準] 1 規定の3分の2以上の出席 2 終講試験が60点以上の者 総合的に評価し単位を認定する。	

# 授 業 概 要

科目名 介護過程Ⅱ		授業の種類 演習	授業担当者 木村ひとみ・佐藤 正幸 丸山 保子 (実務経験者)
授業回数 45回	時間数(単位数) 90時間(3単位)	配当学年・時期 2学年 通年	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>実習での体験等を用いながらアセスメントの実施、介護計画の立案、適切な介護サービスの提供を行い、介護過程を展開できる能力を養う。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>介護過程について、アセスメントからモニタリングまでの一連の流れを実践の場で展開しうる能力を身につけていく。また、介護福祉士の視点からのチームアプローチについて熟知し、実践において幅広い視野を持って介護過程を展開できる能力を身につけていく。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ICFの基礎的概念が理解でき、さまざまな対象者の介護過程を展開できる。</li> <li>2 介護過程の展開において、チームアプローチの視点を取り入れることができる。</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 チームアプローチにおける介護福祉士の役割</li> <li>2 介護計画(個別支援計画書)の実際</li> <li>3 介護計画の例①(A、B)</li> <li>4 介護計画の例②(A、B)</li> <li>5 介護記録の意義</li> <li>6 介護計画と実施と記録①</li> <li>7 介護計画と実施と記録②</li> <li>8 介護過程の実践的展開の事例検討①(特別養護老人ホームの事例)</li> <li>9 介護過程の実践的展開の事例検討②(老人保健施設の事例)</li> <li>10 介護過程の実践的展開の事例検討③(障害者支援施設の事例)</li> <li>11 介護過程の実践的展開の事例検討④(在宅・高齢者の事例)</li> <li>12～17 実習課題の振り返り(個人ワーク・グループワーク)</li> <li>18 介護過程とケアマネジメントの関係性</li> <li>19 チームアプローチの意義</li> <li>20 <u>介護過程とチームアプローチ</u>の関係性</li> <li>21 医療関係者との連携—療養型病床群の介護職員と看護職員の連携例</li> <li>22 他の福祉専門職との連携—介護福祉士会の活動と研修の紹介</li> <li>23 地域における連携—小規模多機能型施設の職員と地域住民との関係のあり方</li> <li>24 利用者のさまざまな生活と<u>介護過程の展開の理解①</u></li> <li>25 利用者のさまざまな生活と<u>介護過程の展開の理解②</u></li> <li>26 理論と実践方法論</li> </ol>			

<p>27 アセスメントからの情報の要点整理、個人ケアプランの作成方法</p> <p>28 ニーズを捉える7つの視点と情報収集</p> <p>29～33 実習課題の振り返り（個人ワーク・グループワーク）</p> <p>34 事例報告会について</p> <p>35～36 発表テーマの選定</p> <p>37～38 事例の情報整理</p> <p>39～40 テーマを軸にした分析</p> <p>41～42 発表原稿・抄録の作成</p> <p>43 事例報告会リハーサル</p> <p>44 事例報告会</p> <p>45 事例報告会</p>	
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>1 最新 介護福祉士養成講座9 「介護過程」中央法規出版</p> <p>2 「ケアプランに活かすICFの視点」日総研出版</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>1 規程の出席が3分の2以上</p> <p>2 授業態度、プレゼンテーションの内容 総合的に評価し、60点以上を合格とする。</p>

# 授 業 概 要

科目名 介護総合演習 I		授業の種類 演習		授業担当者 木村ひとみ・佐藤 正幸 丸山 保子 (実務経験者)	
授業回数 30回	時間数(単位数) 60時間(2単位)	配当学年・時期 1学年 通年		必修・選択 必修科目	
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 体験実習の意義とその重要性について理解する。</li> <li>2 体験実習を通じて学校内で学んだ知識、技術、態度を具体的かつ实际的に理解する。</li> <li>3 習得した学校内諸学習を応用し、実践的な技術等を体得する。</li> <li>4 介護福祉士としての自覚を促し、専門職に求められる資質、技能及び自己に求められる課題把握等、総合的対応能力を習得する。</li> <li>5 事例研究等の進め方を修得する。</li> </ol> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>介護実習をより充実した学習とするために事前準備や振り返りを行い、学校内学習と実習体験を融合させていく。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 福祉専門職にとって実践的学習が重要であることを理解する。</li> <li>2 実践を通じた知識・理論の検証の重要性を理解する。</li> <li>3 事例研究の進め方の基本を身につける。</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p><u>知識と技術の統合</u></p> <p>I 介護実習前の集団指導</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 介護実習の根拠の確認</li> <li>2 基本的なマナーや礼儀などの学習</li> <li>3 ICFと介護 介護過程との関係から実践方法を学ぶ</li> <li>4 記録の書き方について学習①</li> <li>5 記録の書き方について学習②</li> <li>6 実習の基本的な態度や実習生として学ぶ姿勢について学習</li> <li>7 対人援助職としての基本的な姿勢の習得</li> <li>8 利用者本位のサービスについての学習</li> <li>9 プレゼンテーションの方法①</li> <li>10 プレゼンテーションの方法②</li> </ol> <p>II 居宅介護実習 I</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>11 居宅介護実習 I の必要性の理解</li> <li>12 居宅介護実習 I の課題の理解、自己達成目標の確認</li> <li>13～14 実習先、施設についての理解             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) サービスの種類と内容、対象者を確認する</li> </ol> </li> </ol>					

- 2) 関係法令等を調べ、理解する
- 3) 機関側からの実習に関する諸注意事項についての確認と必要要件を準備する
- 4) 各実習生から得られた資料等による実習への諸注意を伝達する

(注) 教員は居宅介護実習機関との連絡打ち合わせを実施して上記演習に臨む  
・学校課題の説明、施設側からの実習生への注意事項、事前実習有無等

#### 1 5～1 6 実習中（直後）の集団指導

- 1) 実習での感想を話し合う（疑問点、反省点を含めつつ言語化へ）
- 2) 他の学生の意見、感想を聞きながら、または意見交換しながら自分自身の経験を再検討する
- 3) 実習前に立てた自己課題と学校の実習課題について検討する
- 4) 必要に応じて新しい自己目標を建て直す
- 5) 居宅介護実習Ⅰのまとめのレポートを作成する

#### 1 7 実習後の評価とまとめ

- 1) 自己評価を作成する
- 2) 自己評価と施設評価・教員評価を統合する

### Ⅲ 介護実習Ⅰ

#### 1 8 介護実習Ⅰの必要性の理解

#### 1 9 学生各自の実習への期待と自己目標の確認

#### 2 0～2 1 実習先、施設についての理解

- 1) サービスの種類と内容、対象者を確認する
  - 2) 関係法令等を調べ、理解する
  - 3) 施設側からの実習に関する諸注意事項についての確認と必要要件の準備を行う
- (注) 教員は施設との連絡打ち合わせを実施して上記演習に臨む  
・学校課題の説明、施設側からの実習生への注意事項、事前実習有無等

#### 2 2 実習記録の書き方

- 1) 実習記録の書き方を確認する（使い方、書き込み手順）
- 2) 実習記録を先輩のよい書き方例から学ぶ（記録の必要性と表現方法等の説明）

#### 2 3～2 4 実習中（直後）の集団指導

- 1) 実習での感想を話し合う（疑問点、反省点を含めつつ言語化へ）
- 2) 他の学生の意見、感想を聞きながら、または意見交換しながら自分自身の経験の再検討する
- 3) 実習前に立てた自己課題と学校の実習課題について検討する
- 4) 必要に応じて新しい自己目標の建て直す
- 5) 介護実習のまとめのレポートを作成する

#### 2 5 実習後の評価とまとめ

- 1) 自己評価を作成する
- 2) 自己評価と施設評価・教員評価を統合する

### Ⅳ 介護実習後の集団指導

#### 2 6～3 0 介護実践の科学的探求（1年間の振り返り）

- 1) 介護福祉士としての自己について1年間の学習と訓練を振り返り、自己の新たな発見や今後に向けての決意、意志を明確にする。

2) 実習中における利用者との関係ばかりではなく、職員、家族、地域などとの人間関係のあり方についても再検討し、介護現場での介護福祉士として役割を確認する。

3) 1年間の学習を振り返り、個々の介護福祉士像を文章化し、年度末の実習報告会で発表する。

[使用テキスト・参考文献]

- 1 最新 介護福祉士養成講座 10  
「介護総合演習・介護実習」中央法規出版
- 2 「介護福祉に関する記録について」本校作成

[単位認定の方法及び基準]

- 1 規定の3分の2以上の出席
  - 2 課題レポート、および発表内容
- 総合的に評価し、60点以上のものについて単位認定をする。

# 授 業 概 要

科目名 介護総合演習Ⅱ		授業の種類 演習	授業担当者 木村ひとみ・佐藤 正幸 丸山 保子 (実務経験者)
授業回数 30回	時間数(単位数) 60時間(2単位)	配当学年・時期 2学年 通年	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 体験実習の意義とその重要性について理解する。</li> <li>2 体験実習を通じて学校内で学んだ知識、技術、態度を具体的かつ实际的に理解する。</li> <li>3 習得した学校内諸学習を応用し、実践的な技術等を体得する。</li> <li>4 介護福祉士としての自覚を促し、専門職に求められる資質、技能及び自己に求められる課題把握等、総合的対応能力を習得する。</li> <li>5 事例研究等の進め方を修得する。</li> </ol> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>介護実習をより充実した学習とするために事前準備や振り返りを行い、学校内学習と実習体験を融合させていく。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 福祉専門職にとって実践的学習が重要であることを理解する。</li> <li>2 実践を通じた知識・理論の検証の重要性を理解する。</li> <li>3 事例研究の進め方の基本を身につける。</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p><u>知識と技術の統合</u></p> <p>I 介護実習Ⅱ</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 介護実習Ⅱの必要性の理解</li> <li>2 2年間の実習全体像を把握</li> <li>3 学生各自の実習への期待と自己目標の確認</li> </ol> <p>4～5 実習先、施設についての理解</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) サービスの種類と内容、対象者を確認する</li> <li>2) 関係法令等を調べ、理解する</li> <li>3) 施設側からの実習に関する諸注意事項についての確認と必要要件の準備を行う (注) 教員は施設との連絡打ち合わせを実施して上記演習に臨む ・学校課題の説明、施設側からの実習生への注意事項、事前実習有無等</li> </ol> <p>6 実習記録の書き方</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 実習記録の書き方を確認する(使い方、書き込み手順)</li> <li>2) 実習記録を先輩のよい書き方例から学ぶ(記録の必要性と表現方法等の説明)</li> </ol> <p>7～8 実習中(直後)の集団指導</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 実習での感想を話し合う(疑問点、反省点を含めつつ言語化へ)</li> <li>2) 他の学生の意見、感想を聞きながら、または意見交換しながら自分自身の経験の再検討する</li> </ol>			



- 3) 実習前に立てた自己課題と学校の実習課題について検討する
- 4) 必要に応じて新しい自己目標の建て直す
- 5) 介護実習のまとめのレポートを作成する

#### 9 実習後の評価とまとめ

- 1) 自己評価を作成する
- 2) 自己評価と施設評価・教員評価を統合する

## II 居宅介護実習 II

### 1 0～1 1 居宅介護実習 II の必要性の理解

- 1) 訪問介護、障害者支援についての学習の振り返りをする
- 2) 訪問介護、障害者支援の具体的方法について演習を通して確認する
- 3) 居宅介護実習 II の課題を理解し、達成できるように自己達成目標や手順を明確にする
- 4) 学生各自の実習への期待と自己目標を立てる

### 1 2～1 3 実習先、施設についての理解

- 1) サービスの種類と内容、対象者を確認する
- 2) 関係法令等を調べ、理解する
- 3) 機関側からの実習に関する諸注意事項についての確認と必要要件の準備
- 4) 各実習生から得られた資料等による実習への諸注意伝達

(注) 教員は居宅介護実習機関との連絡打ち合わせを実施して上記演習に臨む  
・学校課題の説明、施設側からの実習生への注意事項、事前実習有無等

### 1 4～1 5 実習中（直後）の集団指導

- 1) 実習での感想を話し合う（疑問点、反省点を含めつつ言語化へ）
- 2) 他の学生の意見、感想を聞きながら、または意見交換しながら自分自身の経験を再検討する
- 3) 実習前に立てた自己課題と学校の実習課題について検討する
- 4) 必要に応じて新しい自己目標の建て直す
- 5) 居宅介護実習 II のまとめのレポートを作成する

### 1 6 実習後の評価とまとめ

- 1) 自己評価を作成する
- 2) 自己評価と施設評価・教員評価を統合する

## III 介護実習 III

### 1 7 介護実習 II・III の必要性の理解

### 1 8 2 年間の実習全体像を把握

### 1 9 学生各自の実習への期待と自己目標の確認

### 2 0～2 1 実習先、施設についての理解

- 1) サービスの種類と内容、対象者を確認する
- 2) 関係法令等を調べ、理解する
- 3) 施設側からの実習に関する諸注意事項についての確認と必要要件の準備を行う

(注) 教員は施設との連絡打ち合わせを実施して上記演習に臨む

・学校課題の説明、施設側からの実習生への注意事項、事前実習有無等

### 2 2 実習記録の書き方

<p>1) 実習記録の書き方を確認する（使い方、書き込み手順）</p> <p>2) 実習記録を先輩のよい書き方例から学ぶ（記録の必要性と表現方法等の説明</p> <p>2 3～2 4 実習中（直後）の集団指導</p> <p>1) 実習での感想を話し合う（疑問点、反省点を含めつつ言語化へ）</p> <p>2) 他の学生の意見、感想を聞きながら、または意見交換しながら自分自身の経験の再検討する</p> <p>3) 実習前に立てた自己課題と学校の実習課題について検討する</p> <p>4) 必要に応じて新しい自己目標の建て直す</p> <p>5) 介護実習のまとめのレポートを作成する</p> <p>2 5 実習後の評価とまとめ</p> <p>1) 自己評価を作成する</p> <p>2) 自己評価と施設評価・教員評価を統合する</p> <p>IV 介護実習後の集団指導</p> <p>2 6～3 0 <u>介護実践の科学的探求</u>（2年間の振り返り）</p> <p>1) 介護福祉士としての自己について2年間の学習と訓練を振り返り、就職に向けての方向付けや決意、意志を明確にする。</p> <p>2) 実習中における利用者との関係ばかりではなく、職員、家族、地域などとの人間関係のあり方についても再検討し、介護現場での介護福祉士として役割を確認する。</p> <p>3) 2年間の学習を振り返り、介護福祉士としての介護観を文章化し、年度末の実習報告会で発表する。</p>	
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>1 最新 介護福祉士養成講座 10</p> <p>「介護総合演習・介護実習」中央法規出版</p> <p>2 「介護福祉に関する記録について」本校作成</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>1 規定の3分の2以上の出席</p> <p>2 課題レポート、および発表内容</p> <p>総合的に評価し、60点以上のものについて単位認定をする。</p>

## 授 業 概 要

科目名 介護実習 I (第 1 段階実習)		授業の種類 実習		授業担当者 丸山 保子 木村 ひとみ 佐藤 正幸 (実務経験者)	
授業回数 1 日 7. 5 時間	時間数 (単位数) 9 0 時間 (2 単位)	配当学年・時期 1 学年 後期	必修・選択 必修科目		
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>(1) 地域における様々な場において、対象者の生活を理解し、本人や家族とのコミュニケーションや生活支援を行う基礎的な能力を習得する。</p> <p>(2) 本人の望む生活の実現に向けて、多職種との協働の中で、介護過程を実践する能力を養う。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>コミュニケーション関係が比較的可能な障害者施設と老人施設を実習施設とし、利用者とのふれあいを通じて他者に共感できる、また、生活の理解を深め、施設職員の一般的な役割について学ぶ</p> <p>[授業終了時の達成課題 (到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 人間的なふれあいを通して利用者を理解する</li> <li>2 介護に必要な基礎知識と技術を習得する</li> <li>3 施設の役割を知る</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p><u>介護過程の実践的展開</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 利用者の施設での生活リズムを理解する</li> <li>(2) 人間的なふれあいの中で利用者とかかわりを持ち、情報を得る。</li> <li>(3) 初歩的な日常生活援助を実践し、生活支援技術の基礎を学ぶ</li> <li>(4) 実習施設の特徴を知る</li> <li>(5) 介護福祉士の役割を知る</li> </ol>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>最新 介護福祉士養成講座 10 「介護総合演習・介護実習」中央法規出版</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 実習日程の 5 分の 4 の出席</li> <li>2 施設評価 5 0 %</li> <li>3 学校評価 5 0 %</li> </ol> <p>上記の総合評価 6 0 点以上の者に単位認定をする。</p>		

# 授 業 概 要

科目名 介護実習Ⅱ（第2段階実習）		授業の種類 実習		授業担当者 丸山 保子 木村 ひとみ 佐藤 正幸 (実務経験者)	
授業回数 1日7.5時間	時間数(単位数) 90時間(2単位)	配当学年・時期 2学年 前期		必修・選択 必修科目	
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>(1) 地域における様々な場において、対象者の生活を理解し、本人や家族とのコミュニケーションや生活支援を行う基礎的な能力を習得する。</p> <p>(2) 本人の望む生活の実現に向けて、多職種との協働の中で、介護過程を実践する能力を養う。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>多職種との協働の中で、介護福祉士としての役割を理解するとともに、サービス担当者会議やケースカンファレンス等を通じて、多職種連携やチームケアを体験的に学ぶ。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 施設の介護計画に基づいた基本的な生活支援を理解することができ、支援方法を考えることができる。また生活支援を行うことができる</li> <li>2 多職種との連携を通じ、チームの一員としての介護福祉士の役割について理解する。</li> <li>3 対象者の観察から、生活課題を導き出すことができる。</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p><u>介護過程の実践的展開</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 利用者個々の生活リズムと個性がわかる</li> <li>(2) 個別性のある介護の必要性がわかる</li> <li>(3) 利用者の介護計画に基づいた生活支援の基本が実践できる</li> <li>(4) 利用者の個別性を理解し、その方に合った生活支援技術が提供できる。</li> </ol> <p><u>多職種協働の実践</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(5) 多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割を知る</li> <li>(6) カンファレンス等に参加し、利用者の生活の質を向上させる取り組みを学ぶ。</li> <li>(7) 実習施設の施設方針、役割、構造などがわかる。</li> <li>(8) 情報収集の必要性を理解し、情報収集の仕方、記録の仕方を学ぶ</li> <li>(9) 情報から介護計画の立案方法を学ぶ</li> </ol>					
[使用テキスト・参考文献] 最新 介護福祉士養成講座 10 「介護総合演習・介護実習」中央法規出版			[単位認定の方法及び基準] 1 実習日程の5分の4の出席 2 施設評価50% 3 学校評価50% 上記の総合評価60点以上の者に単位認定をする。		

# 授 業 概 要

科目名 介護実習Ⅲ（第3段階実習）		授業の種類 実習	授業担当者 丸山 保子、木村 ひとみ 佐藤 正幸 (実務経験者)
授業回数 1日7.5時間	時間数(単位数) 180時間(4単位)	配当学年・時期 2学年 後期	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>(1) 地域における様々な場において、対象者の生活を理解し、本人や家族とのコミュニケーションや生活支援を行う基礎的な能力を習得する。</p> <p>(2) 本人の望む生活の実現に向けて、多職種との協働の中で、介護過程を実践する能力を養う。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>介護過程の展開を通して対象者を理解し、本人主体の生活と自立を支援するための介護過程を実践的に学ぶ。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 利用者個々の生活リズムや個性に応じた生活支援の在り方を理解する</li> <li>2 一連の介護過程の展開を継続的に実践することができる</li> <li>3 チームの一員として介護を遂行することができる</li> <li>4 介護福祉士を目指すものとして専門性のあり方を理解できる</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p><u>介護過程の実践的展開</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 利用者のADL等に対応した介護技術が適切に活用できるようになる。</li> <li>(2) 実践した介護に対し、利用者の反応や結果を把握して記録し、評価・考察することによりそれぞれの介護過程を認識できるとともに、次回の介護に生かすことができるようになる</li> <li>(3) 対象者の生活課題を把握し、介護計画の立案、展開の方法、記録について学ぶ</li> <li>(4) 学生カンファレンス実施し、指導者の承諾を得た後、計画を実践し、結果を評価・考察する</li> <li>(5) 介護の継続性を認識し、介護過程の展開について理解できるようになる</li> </ol> <p><u>多職種協働の実践</u></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(6) 看護業務を実際に見学し、利用者の健康管理や、異常の早期発見、また事故時の対応と保健・医療・福祉関係者への連携について学ぶ。</li> <li>(7) その他の関係職種(相談援助、リハビリテーション、栄養士など)の業務について学び、チームワークの必要性を学ぶ</li> <li>(8) 職業倫理を身につけ、介護観を持つことができるようになる</li> </ol>			
[使用テキスト・参考文献] 最新 介護福祉士養成講座 10 「介護総合演習・介護実習」中央法規出版		[単位認定の方法及び基準] 1 実習日程の5分の4の出席 2 施設評価50% 3 学校評価50% 上記の総合評価60点以上の者に単位認定をする。	

# 授 業 概 要

科目名 居宅介護実習 I		授業の種類 実習	授業担当者 丸山 保子 木村 ひとみ 佐藤 正幸 (実務経験者)
授業回数 1日7.5時間	時間数(単位数) 4.5時間(1単位)	配当学年・時期 1学年 後期	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>(1) 地域における様々な場において、対象者の生活を理解し、本人や家族とのコミュニケーションや生活支援を行う基礎的な能力を習得する。</p> <p>(2) 本人の望む生活の実現に向けて、多職種との協働の中で、介護過程を実践する能力を養う。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>実習に臨む姿勢を修得し、利用者とのコミュニケーションを通して、利用者の望む生活とはどのようなものなのか、利用者の言葉を捉えることを学ぶ。施設実習とは異なる居宅介護の特性について学ぶ。学びを記録に残す。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 多様な生活の場があることを理解する</li> <li>2 生活の場に入らせていただくことを理解し、実習に臨むことができる</li> <li>3 利用者とかかわりを持つことができる。</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p><u>地域における生活支援の実践</u></p> <p>* 3つの事業所・施設において2日間ずつ計6日間の実習を行う</p> <p>(1) 通所介護事業所での体験実習(2日間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通所介護事業所における介護業務を体験する</li> <li>・利用者の心身の状態を理解し、利用者に応じたコミュニケーション技術を学ぶ</li> <li>・レクリエーション活動に参加する</li> </ul> <p>(2) 認知症対応型共同生活介護(グループホーム)での体験実習(2日間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・認知症対応型共同生活介護での介護業務を体験する</li> <li>・利用者とのコミュニケーションや趣味活動などのかかわりを通して、認知症高齢者とのかかわり方や、役割、楽しみのある生活について学ぶ。</li> <li>・安全・安楽な生活継続のための環境整備や工夫を学ぶ</li> </ul> <p>(3) 障害者支援施設での体験実習(2日間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障害者支援施設での介護業務を体験する</li> <li>・利用者の心身の状態を理解し、障害に応じたコミュニケーション技術を学ぶ</li> </ul>			
[使用テキスト・参考文献] 最新 介護福祉士養成講座 10 「介護総合演習・介護実習」中央法規出版		[単位認定の方法及び基準] 1 実習日程の5分の4の出席 2 施設評価50% 3 学校評価50% 上記の総合評価60点以上の者に単位認定をする。	

# 授 業 概 要

科目名 居宅介護実習Ⅱ		授業の種類 実習	授業担当者 丸山 保子 木村 ひとみ 佐藤 正幸 (実務経験者)
授業回数 1日7.5時間	時間数(単位数) 4.5時間(1単位)	配当学年・時期 2学年 前期	必修・選択 必修科目
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>(1) 地域における様々な場において、対象者の生活を理解し、本人や家族とのコミュニケーションや生活支援を行う基礎的な能力を習得する。</p> <p>(2) 本人の望む生活の実現に向けて、多職種との協働の中で、介護過程を実践する能力を養う。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>小規模多機能型居宅介護における介護を体験する。</p> <p>生活形態、家族との関係、自立支援、家族への援助、保健医療との連携などをテーマにして実習を行う。</p> <p>[授業終了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>1 小規模多機能型居宅介護における利用者支援のあり方を見学・体験し、利用者の生活ニーズに応じた介護方法を理解できる。</p> <p>2 多職種協働や関係機関との連携を通じて、チームの一員としての介護福祉士の役割について理解できる。</p>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p><u>地域における生活支援の実践</u></p> <p>(1) 事業所職員に同行し、各家庭における介護を体験する。</p> <p>(2) 利用者の生活状況を把握し、生活課題に応じて提供される介護サービスについて学ぶ。</p> <p>(3) 利用者の心身の状態、生活環境に応じた介護方法や工夫・留意点を学ぶ。</p> <p>(4) 利用者が住み慣れた地域での生活を継続するために利用しているサービスを理解し、多職種との連携を学ぶ。</p>			
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>最新 介護福祉士養成講座 10 「介護総合演習・介護実習」中央法規出版</p>		<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>1 実習日程の5分の4の出席 2 施設評価50% 3 学校評価50% 上記の総合評価60点以上の者に単位認定をする。</p>	